

松阪市子ども支援研究センターだより

E-mail: kyo.div@city.matsusaka.mie.jp <http://www.city.matsusaka.mie.jp>

松阪教育支援センター「鈴の森教室」TEL 26-1900 FAX 26-1901 E-mail: suzunomori@matsusaka.ed.jp
松阪教育支援センター「うれしの教室」TEL 42-7374 FAX 42-4568 E-mail: uresino-k@matsusaka.ed.jp



1年間ありがとうございました



先日、教育委員会の祝辞をお伝えに、中学校の卒業証書授与式に参列をさせていただきました。3年間の中学校生活、9年間の義務教育のまさに集大成にふさわしい大変感動的な式でした。200人を超える卒業生が、“スッ”と一瞬で起立する様子から感心させられました。校長先生は、卒業生や在校生、保護者、来賓、教職員の方をずっと向かれたまま、堂々と語り掛けるように式辞を述べられました。何ととっても、やはりクライマックスは答辞です。次第に涙声になり、とぎれとぎれに答辞を読む卒業生代表、起立したまますすり泣く卒業生、ハンカチで涙をふく教職員、壇上で校長先生も号泣されていました。そして、卒業生全員の様々な思いを込めた式歌の合唱。練習では素晴らしい歌声でも、なかなか当日は涙でうまく歌えないものですが、とても立派な合唱でした。最後に、担任の先生を先頭に、拍手に送られての卒業生の退場。卒業生一人ひとりが、中学校生活の思い出と支えてくれた人々の顔を、次から次へと思い浮べていたことでしょうか。卒業後の進路が決まった人、2日後の後期試験を受ける人、その姿を見送るわれわれは、今後の人生を力強く歩んでほしいと願うばかりでした。

市内のどの中学校でも、同様の素晴らしい卒業証書授与式が行われたことと思います。そして、間もなく、小学校で卒業証書授与式が、幼稚園では卒園式が行われます。卒業証書授与式や卒園式は、子ども、保護者、地域の方、教職員が一堂に集い、祝う、人生における節目の行事です。そして、“教職の喜び”を実感するときです。

今年1年間、行政で仕事をさせていただいて初めてわかったことがあります。それは、行政も各部署において、松阪市の子どものために、あるいは、教職員のことを考えて、毎日、一生懸命に業務に取り組んでいるということです。決められた期間内に、限られた予算内で、多くの関係機関と対応し、最善の方法を考え、何度も書類を作り直し、計画の実行を目指して、膨大な仕事量をこなしています。まさに、縁の下で学校現場を支えてもらっていることを知り、本当に頭の下がる思いになりました。今まで気がつかなかった驚きと感謝の気持ちで一杯です。

この「センターだより」では、自由に記事を書かせていただきました。これまでの経験から感じたことやお伝えしたかったこと、単なる親バカや家族ネタ（家でこっぴどく叱られました）など・・・拙い文章になりましたこと、お詫び申し上げます。それでも、中には「読みました」と言ってくださる方がみえて、うれしい気持ちになりました。

間もなく桜の花も咲くでしょう。「別れと出会い」の季節です。新年度4月から、新鮮な気持ちで、松阪市の子どものために尽力していく所存です。この1年、子ども支援研究センターの活動にご協力、ご支援をいただきまして、誠にありがとうございました。

(所長 藪 晃明)

子ども支援研究センター研修集録

2人の長期研修員が、市内の小中学校にご協力いただき取り組んだ研究を、研修集録にまとめました。



研究集録 第131集

「特別の教科 道徳」指導と評価の視点から考える — 「私たちの道徳」を活用した実践研究を通して —

現在、道徳教育を通じて、子どもが直面する様々な状況の中で、そこにある事象を深く見つけ、自分はどうすべきか、自分に何ができるかを判断し、そのことを実行する手立てを考え実践できるようにしていくために道徳の時間の改善が必要であるとされています。

本研究では、小学6年生を対象に、道徳授業の指導の工夫と評価の視点から、「私たちの道徳」を活用した実践研究を行いました。市内の小学校2校において同時に実践を行い、「ねらい」の設定や指導過程の見直し、発問の工夫やワークシートの活用など、具体的な実践方法を考え出すことができました。また、評価については、振り返りと授業記述を基にした評価を一例として示すことができました。

平成30年度より実施される道徳科において、日々、道徳教育に取り組むそれぞれの場所で、本研究を指導資料の一つとして活用していただければ幸いです。

(長期研修員 高橋 正寛)

研究集録 第132集

「アクティブ・ラーニング」の視点からの学びを より効果的にするICT活用 — つけたい力を育む国語の授業づくりを通して —

次期学習指導要領に向けて、学びの質や深まりが重視され、主体的・対話的で深い学びを実現させるために「アクティブ・ラーニング」の視点からの学習過程の改善が必要だとされています。また、「教育の情報化加速化プラン」が公表されるなど、学校における教育の情報化については一層の充実が図られています。

そこで本研究では、電子黒板と生徒一人1台のタブレット端末が整備された2校に協力を依頼し、「アクティブ・ラーニング」の視点からの授業の計画と実践を目指すとともに、それをより効果的にするICTの活用方法の検討に取り組みました。

実際に「アクティブ・ラーニング」の視点で学習過程を計画・実践することで実感した効果と課題、また、その実践を効果的にする具体的なICTの活用方法と留意点が見えてきました。今回は、教科でのICT活用の中でも、特に主体的・対話的で深い学びを目指した「アクティブ・ラーニング」の視点からの学習を効果的にするという視点で考察しました。それぞれの学校で、指導資料の一つとしてご活用いただければ幸いです。

(長期研修員 坂口 友視)